

伝統と革新の鋳起銅器 200年を経て 磨かれてきた美意識

「玉川堂」の魅力とは。



湯沸 口打出 打出肌金色 草づる



職人の仕事場。若い人や女性もいる。



叩いて、縮めて、
1枚の銅板を成形していく。

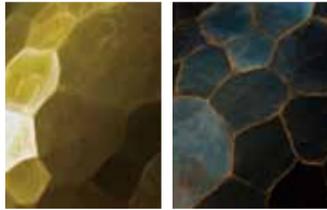


焼きなましを行う火炉。



約300種類におよぶ鳥口。

●玉川堂の色彩



(右) 玉川堂を代表する色彩である紫金色。銅に錫を焼き付け、着色液につけることで起こる化学変化により生まれる。
(左) 同じく銅に錫を焼き付け、酸化させる事で輝かしい金色の色彩となる。

銅器を出品したのです。世界の技術工芸品が集まるなかで、彫金や象嵌などの美術的要素を銅器に施し、その美しさを追求していきました。その意思を継いだ3代目は、刀の鐔の装飾に用いられる彫金技術を巧みに取り入れるなどし、玉川堂の銅器は工芸品として高い評価を得るとともに様々な賞を受賞するまでになったのです。4代目の時代は、今の製品作りの大きな基盤となる製法が開発された時期で、1枚の銅板から打ち出して注ぎ口まで成形する口打出技法や着色技術などの開発もこの時代の功績でした。5代目は私の祖父にあたりますが、戦争による銅器業界存続の危機を越え、戦後いち早く復興に着手しました。その後鋳起の技術は「新潟県無形文化財」や文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に指定されました。6代目の実弟である宣夫は、色彩の異なる金属を重ね合わせて木目模様をつくる木目金の第一人者として活躍し、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されています。そして現在は7代目、基行が活躍してい

ます。時代によって新しいものを取り入れ作風は変わってきましたが、いつの時代も逆風をチャンスに変え、創意工夫のもとその技術を高め続けて今日に至るのです」

世代を超えて愛用する銅器の魅力

現在の玉川堂の鋳起銅器はどのように製作されているのだろうか。

燕本店は明治末期に建てられた趣のある日本家屋で、国の登録有形文化財に登録されている。母屋の奥には工房があり、日がな銅板を叩く鈍音が響いている。職人は20名以上おり、女性も多い。熟練の職人と若い職人が組んで製作を行い、技が伝承されている。「口打出」という湯沸を製作するためには数10種類の鳥口と呼ばれる当て金と金鋳を使用する。湯沸の寸法は職人の頭の中。銅板を叩きながら縮めていくことで、一枚の板を器状に徐々に絞っていく。時おり火炉で銅器を熱して焼きなまししながら、注ぎ口まで継ぎ目なしで成形していく。

「鈍音を聞いていれば腕の良し悪しはわかりません。1枚の銅板から成形する口打出は約15年以上の腕が必要ですよ」

成形した湯沸は独自開発した着色方法によって、唯一無二の色彩に仕上がる。玉川堂は長い歴史のなかで試行錯誤を繰り返して多彩な着色方法をあみ出した。驚くことに、着色方法等は多くのブランドが秘密を保持するなかで、玉川堂は職人の仕事場を一般の人に公開している。取材日も見学者がひっきりなしに工房を訪れており、敷居の高い名門とは違って変わって門戸は広く開かれていた。

200年の時を経て磨かれてきた美意識

2016年4月、東京・銀座6丁目の「GINZA SIX」にオープンした「玉川堂」は大きな話題を呼んだ。天井、床、壁全面がまばゆいばかりに光輝く銅板製。銅に包まれた空間には美しい鋳起銅器が飾られ、見るものを圧倒していた。

「店舗を飾った銅板は、厚さ0.6mm、幅365mm、長さ1200mm程の銅板を約400枚、社員全員で1枚1枚鋳目をつけました。職人の持つ技と銅が持つ魅力でお店を包み込んだのです。青山に続き都内2店目となる店舗ですが、国内のみならず海外のお客様からも多数ご来店いただいております」

こう話すのは玉川堂の玉川洋基専務取締役。例えば玉川堂の代表的な銅器の一つである「口打出」という湯沸は、1枚の銅



三代 玉川 寛平 作
「飾香炉金象嵌」(明治23年)



フィラデルフィア万国博覧会
最高賞受賞(大正15年)



燕本店は明治末期に建てられた趣のある日本家屋。
国の登録有形文化財に指定されている。



株式会社玉川堂 専務取締役
玉川 洋基 氏

「玉川堂は2016年で200周年を迎えましたが、長い歴史のなかで、銅器は大きな変化を遂げてきました。新潟県・燕では、江戸時代初期、和釘づくりが始まりました。その後仙台からの渡り職人が伝えた鋳起銅器の製法を、文化13(1816)年、玉川寛兵衛が継承しました。かつて優良な銅を産出した弥彦山が近くにあったことも、この地に鋳起銅器が根付いた大きな理由です。寛兵衛は鍋や釜、やかんといった日用品を主に製作しました。転機がきたのは明治6(1873)年、2代目は日本が初めて参加したウイーン万国博覧会に

「一般に公開しているのは、玉川堂の銅器についてもっと知ってもらいたいという想いからです。丁寧に手入れを行えば銅器は世代を超えて、長く愛用できます。現在、修理は年間約300件ほどきていますが、製法が変わらないため昔の製品でも修理ができるのです。銅器は手入れをしながら長く付き合っていくもの。それをお客様にお伝えしたいのです」

機械によってつくられた工業製品は購入した時が最高で、その後時とともに褪せていく。しかし銅器は手にしてから、時を重ねるごとに色合いが深まり、味わいが増していく。世代を超えた顧客との付き合いに思いを馳せられるのは銅ならではの優れた耐久性があるからであろう。

玉川堂では、フェラーリのデザインや鉄道車両のデザインを手がける、世界的な工業デザイナー、奥山清行氏とコラボレートし、ティーポット等を製作している。スタイリッシュなフォルムと伝統的な色合いと鈍目が調和し、新鮮な魅力を発揮している。守べきものは守りながら常に新しいことに挑戦し続ける。伝統と革新。そして200年の時を経て磨かれてきた美意識。玉川堂が今も輝きつづける理由はそこにあるのだろう。

板を職人が
金鋳で打ち
縮めながら
注ぎ口まで
継ぎ目なく
つくり上げ
たもの。艶々
とかが豊かな味わいを醸し出している。価格は50万円に及ぶが、一生ものというには短過ぎるほど、親から子、子から孫へ世代を越えて愛用することが可能。実用品としての高い機能と品質を持ちながら、工芸品としても飾っておきたい美しいう行まいを持つ。その美しさには玉川堂の歴史が深く関わっているのである。



世界的な工業デザイナー・奥山氏とコラボレートしたティーポット。